文法化　―ロマンス言語学と一般言語学

Grammaticalisation — linguistique romane et linguistique générale

後藤　斉

GOTOO Hitosi

1．文法化とは

近年、言語学において文法化に対する関心が高まっている。これは、おおむね、語彙的な要素が文法的な要素に変化する過程をいう。現在のところ最も標準的な概説書である Hopper-Traugott (2003: 231)によれば、次のように定義される。

> the change whereby lexical items and constructions come in certain linguistic contexts to serve grammatical functions and, once grammaticalized, continue to develop new grammatical functions.

この種の現象は通言語的に広く観察されるものであり、多くの言語からの事例が例として挙げられる。これが歴史的な現象である以上、ロマンス語のような歴史的な資料を数多く備える言語がとりわけ引き合いに出されるとしても当然ではある。

しかし、ロマンス語とこの現象との間の関係はそれにとどまるものではない。この術語が、フランス語 grammaticalisation の形で Meillet (1912)に由来することは Hopper-Traugott (2003: 19)が指摘するところである。周知のように、Meillet (1866-1936)はインド・ヨーロッパ語学者であるが、その関心はインド・ヨーロッパ祖語の再建にとどまらず、ラテン語以降のロマンス語の歴史や一般言語学的な言語変化の全体像の法則性に及んでいた。Meillet の「文法化」の概念はこのような彼の関心の中に位置づけられるべきものである。

本稿の目的は、この「文法化」が一般言語学およびロマンス言語学においていかなる意味をもつ概念であるかを、とくに Meillet の立場に関連して、考察しようとするところにある。

Meillet 以前にもこの種の現象に注意が向けられなかった訳ではない。実際、Hopper-Traugott (2003: 19-21)は、第 2 章「文法化研究の歴史」において文法化研究の先駆者として W. von Humboldt (1767-1835)や G. von der Gabelenz (1840-93)の名前を挙げることを忘れてはいない。なお、さらに以前に遡る他の学者の名前が引き合いに出されることもあるが、言語の歴史の研究がしっかりした理論的基盤に立って行われるようになったのは 19 世紀のドイツにおいてであり、それ以前については文法化研究の萌芽以上のものとみなすことには無理がある。

19 世紀の歴史言語学をリードした青年文法学派の代表格としては Paul (1846-1921)の名前を

欠かすことはできないであろうが、Hopper-Traugott は Paul の業績に触れることが少ない。しかしながら、Meillet の「文法化」概念の特徴は、時代がかなり重なりながらも立場を異にした Paul との比較によって、より明らかにすることができるものと考えられる。

2．Paul における「文法化」

よく知られているように、パウルの主著 *Prinzipien der Sprachgeschichte*『言語史原理』(Paul 1920, 初版は 1880 年、内容を大きく変える最後の改訂は 1909 年の第 4 版)は音韻変化と類推を中心に言語の変化を説明しようとする青年文法学派の学説の総決算である。しかし、「例外のない音韻法則」といった青年文法学派の教条的説明にとどまることなく、個人における心理作用を援用しつつ言語の歴史的変化の原理を解明しようとしている。また、音韻や形態といった青年文法学派が得意とする領域だけでなく、統語論や意味論の領域における言語変化も豊富な例をあげつつ広く扱っているところに特徴がある。

実際、『言語史原理』の扱う範囲は極めて広く、その中には、Meillet 以降は文法化に含まれることになる変化も含まれているのである。例えば、第 16 章「統語的構成の推移」には次のような観察が見られる。

> In den Sprachen, welche als Negation oder als Verstärkung derselben ein ursprünglich substantivisches Wort verwenden, findet sich daneben ein Genitiv, der ursprünglich von diesem Substantivum abhängig war, allmählich aber zu einem selbständigen Satzgliede geworden ist und nun als Subj. oder Objekt fungiert, während das Wort, von dem er ursprünglich abhing, seine substantivische Natur eingebüsst hat. Vgl. franz. *il n'a pas (point) d'argent.* (Paul 1920: 292)
>
> 否定詞としてあるいはその強調としてもともと名詞的な語を用いる言語においては、それに並んで属格がみられる。その属格はもともとその名詞に従属していたが、次第に自立した文成分になって、いまや主語ないし目的語として働いている。一方、それがもともと従属していた語はその名詞的な性質を失っている。フランス語 il n'a pas (point) d'argent を参照。

ここで例として挙げられるのはフランス語における pas ないし point による否定の形成の発展であるが、これは Meillet (1912: 140)や Hopper-Traugott (2003: 65)も取り上げる、文法化の典型的な一例である。パウルはこの現象を取り上げ、ここで当該の語がもともとの名詞的性質を失っていることを正しく指摘している。

また、第 19 章「語形成と屈折の成立」では、複合語について詳述した後、派生形成はそれと

はっきりと区別できるものではなく、さらに、屈折接尾辞も派生接尾辞と同様に成立すると言う。

Die Scheidung zwischen Kompositionsglied und Suffix kann nur nach dem Sprachgefühl bestimmt werden. (Paul 1920: 348)

複合の成分と接尾辞との区別は言語感覚によってのみ定めることができる。

Auf die gleiche Weise wie die Ableitungssuffixe entstehen Flexionssuffixe. Zwischen beiden gibt es ja überhaupt keine scharfe Grenze. (Paul 1920: 349)

派生接尾辞と同様の方法で屈折接尾辞が成立する。両者の間にははっきりとした境目はそもそも存在しない。

ここで挙げられる例は、フランス語の副詞形成接尾辞 *-ment* (*fièrement, récemment*) およびフランス語の未来時制 (*j'aimerai* = *amare habeo*)であるが、これらも文法化の典型的な事例として概説書によく挙げられるものである(Hopper-Traugott 2003: 52-55, 140-141)。

さらに、第 20 章「品詞の分離」では、章末に近い部分で、前置詞と接続詞という機能語が名詞や動詞から発生することに触れている(Paul 1920: 369-370)。

Die Präpositionen und Konjuktionen sind als Verbindungswörter immer erst in Folge einer Gliederungsverschiebung aus selbständigen Wörtern entstanden.

前置詞と接続詞は、常に、自立語からの構成の推移の結果、はじめて、連結語として成立した。

ここで例として挙げられているのはドイツ語からのもの (*entsprechend, anstatt* など) が多いが、ラテン語の *scilicet, videlicet* なども含まれる。これも、現在では、文法化に含めて論じることになるであろう。

これまで見てきたように、現在、文法化と呼ばれる言語変化の主なものは Paul も当然のことながら承知しており、語彙的な性格が希薄化して文法的要素に転化することにも気付いていたのである。そもそも『言語史原理』は全体として、青年文法学派としてはむしろ異例なほど柔軟な見地から極めて広範囲な言語変化を取り上げつつ、言語史の原理の解明を目指した歴史言語学の古典であり、現在もその洞察から得られるところは多い。この意味で、Paul の名前は、文法化研究史においてより適切に位置づけられることが望ましい。

そうであるならば、Meillet の功績は、これらの現象に「文法化」という名称を与えたところのみにあるのだろうか。これを考察するには、Paul と Meillet における概念の違いにさらに注目しなければならない。

3．Meillet (1912) 再読

文法化研究の歴史における Meillet (1912) の大きな意義については、Hopper-Traugott もかなりの紙幅を費やして述べており、それをここで単に繰り返すことは避けたいが、いくつかの点は確認しておく必要がある。同論文において Meillet は文法形式が形成される過程には 2 種類あり、一つは類推、もう一つは "le passage d'un mot autonome au rôle d'élément grammatical" 「自立語から文法的要素の役割への移行」であるとする。類推は従来から研究されてきたが、もう一方は研究がきわめて立ち遅れているので、後者を「文法化」と名づけ、その重要性を明らかにしようというのである。その重要性とは、類推が単に形式の細部を改新するだけであるのに対して、文法化は新しい形式を作り出し、それまで言語表現を持たなかったカテゴリーを導入し、体系の全体を変形するところにある(Meillet 1912: 133)。

> Tandis que l'analogie peut renouveler le détail des formes, mais laisse le plus souvent intact le plan d'ensemble du système existant, la «grammaticalisation» de certains mots crée des formes neuves, introduit des catégories qui n'avaient pas d'expression linguistique, transforme l'ensemble du système.

周知の通り、類推は、Paul も一章をあてて扱うような、青年文法学派における言語変化を説明するための重要概念であった。Meillet はそれに対して、文法形式の形成過程としては、文法化の方がそれにまさる重要概念であると主張するのである。Meillet は文法化の研究が「この 40 年にわたって研究がきわめて立ち遅れていた」"beaucoup moins étudié durant les quarante dernières années" (p.133)と述べるが、この「40 年」とは青年文法学派が言語学の中で一世を風靡した時代を指している。ここから、文法化概念の提案は、Meillet が青年文法学派に対抗する姿勢を露わに示していることにほかならないものと理解される。なお、彼は、青年文法学派以前の Bopp を引き合いに出し、(Bopp に倣って)再び文法化研究に取り組むと述べているが、その真意は必ずしも明らかではない。いずれにせよ、彼が向いていた方向は、明らかに過去ではなく将来であった。

ただ、類推は青年文法学派における重要概念であるが、言語変化を説明する最も基本的な道具立てである「規則的な音韻変化」を補うものとしてあった。Meillet にとって文法化概念は、したがって、19 世紀の歴史言語学のなかで確立されていた音韻変化と類推という二つの言語変化の法則性に対して、それと並ぶもの、ないしは重要さの点でそれをしのぐものとして、位置づけられるはずのものであったことになる。この三つの種類の言語変化の法則性は、下記のように定式化される。

音韻変化	x > y
類推	a : b = c : x
文法化	mot autonome > élément grammatical

これもよく知られているように、Meillet はソシュールの弟子であり、言語の体系性と社会性を重視していた。ソシュール以前の言語学において言語を体系と見做すことがまったくなかったとまでは言えない。有名なグリムの法則は一群の音が同様の変化をたどることを述べるものだが、ここには音韻が体系をなしているとの前提がある。類推の概念に関しても、比例式を立てることは、語形変化表に示される程度の文法の体系性は少なくとも想定されていてはじめて可能になる。しかしながら、あらかじめ言語の共時態と通時態を区別した上で、共時態において言語の体系性を重視し、言語要素の価値が、その実質によってではなく、体系の中での他の要素との関係によって決定されることを認めたのはソシュールであった。これは、それまでの言語学、特に青年文法学派的な言語観にはなかった特徴である。

したがって、言語の通時態における言語変化に関しても、その変化が当該言語の体系の中で個別の要素のみに関わるものであるか、それとも体系そのものを変えてしまうものであるかの区別が重要であることを認識することは、ソシュール以後にはじめて可能になったことである。この意味で、Meillet の文法化概念の提案は、歴史言語学において、言語の体系性を重視するソシュールの考えを受け継ぎ発展させたものと言うことができる。

さて、この論文 (Meillet 1912) に挙げられる例の多くはロマンス語史から採られているのだが、このことの意味を確認しておきたい。とりわけ、この論文の後半は、ほとんど未来形と完了形の発展に当てられているが、ここは事実上インド・ヨーロッパ語から現代ロマンス語（特にフランス語）への変遷の略述となっており、内容の上では後の *Esquisse d'une histoire de la langue latine* (Meillet 1933) を思わせるものがある。全体的なテーマの性格からして、*Esquisse* とは違って出典つきの引用例が挙げられることはなく、古典作品と俗ラテン語といった階層による言語の変種にも格別の言及はない。しかし、Meillet は当然すでにこれらの使用例を知っていたはずであり、また、Herzog (1910) などにより、古いロマンス語における実例も目にしていた可能性が高い。

完了形や未来形を取り上げるのは、Meilletによればそれが強調的な意味をもつカテゴリーであって、それを示す文法的要素を認めることが容易であるからである。完了形の発達を例にしてMeilletの説明を略述すれば、以下のようである。まずインド・ヨーロッパ語における、固有の人

称語尾と語幹をもつ特徴的な形態（gr. *léloipa*「私は残した」）は、後代の言語に残存しないが、その理由は、一つには意味の弱化であって、ラテン語の *memini*「私は覚えている」に見られるように現在を表すようになり、また *cecini*「私は歌った」のように過去になった。しかし、完了の形態が失われたことは、隙間を生じた。動作の完了をはっきり示すために、当初は受動態で、動詞派生の名詞的形態をともなう複合形態が発生し、後のロマンス語形成の時代になって能動態にも別種の形態（*habeo dictum*）が現れる。この形態は当初は表現力が極めて強かったが、2語として意識されており、一つの文法形態ではなかった。時が経つと、この *j'ai dit* のタイプは一体化し、単に完成した行為を表すにいたるが、それとともに表現力があせ、完了としての価値を失って、単なる過去になる。これは単純過去（*je dis*）と競合することになり、単純過去は、形態の複雑さも加わって、パリを中心とする現代のフランス語から全く消えてしまう。*j'ai dit* のタイプは完了としての価値を全く失って、単なる過去になったが、これでこの過程が一巡りしたことになる。フランス人は、完了形を手にするために、まだ発生を目にしていない、なんらかの新しい言い回しに頼る必要が出てくるであろう（... pour se donner un parfait, le français devra recourir à quelque tour nouveau, dont on n'entrevoit pas encore la naissance. Meillet 1912: 143)。

Meillet における文法化の定式化は、したがって、個別の言語変化を、それぞれの形態の文法体系の中での位置づけとその機能を十分に考慮に入れた上で、発生から消失の長期間にわたって綿密にたどった後に行われたものである。Meillet はインド・ヨーロッパ諸語の多くに精通していたが、このような、長期にわたる詳細な観察にふさわしい資料を提供できる言語としては、ロマンス語がもっとも適当であったのである。これはロマンス言語学の側からみれば、一般言語学に対しての貢献の一例と言える。

以上のように Meillet の功績を見たところで再び Paul に目を転じれば、「文法化」にあたる言語変化の取り扱い方の表面的であったことを認めざるをえない。Paul は個別の言語変化それ自体はそれぞれ概ね適切に検討を加えはしたものの、言語の体系性に関する理解に欠けていたために、全体の方針としては原理を追求しながらも、ここでは有益な一般化に至ることができなかったのである。結論的にまとめて言えば、Paul は、時代的に 20 世紀に入ってはいたものの、やはり 19 世紀の歴史言語学の総決算という色彩を強く残しているのである。これに対して、Meillet は、分野としては主に歴史言語学において活動したが、理論的な基盤としてははっきりと 20 世紀の言語学の側に属するということになる。

4．最近の文法化研究

Meillet が大きく意気込んで提唱したと思われる「文法化」という術語は、しかしながら、Anttila (1972) や Harris (1978) に受け継がれながらも、しばらくの間は言語史を説明する重要な概念と認識されることはなく、歴史言語学の教科書の片隅に追いやられていた観がある。これは、20 世紀の言語学の関心が全体として共時言語学に向かい、言語の歴史的変化への関心が著しく低下したことに大きな理由があると言えよう。

1980 年代以降、文法化研究への関心が高まっているが、これは 60 年代以降の言語類型論や 80 年代からの認知言語学の発展を受けて、言語の歴史的変化を新しい目で見直す機運の一つの表れと考えられる。Meillet の提唱した「文法化」が特に注目されたのは、言語の体系性の中で言語変化を説明しようとする Meillet の態度が、現代言語学の枠組みの中での歴史的研究との親和性が高いからであろう。

Hopper-Traugott (2003: 25)における

> ... this ... paper ... is astonishingly rich in its insights and the range of phenomena which are analyzed.

という Meillet (1912)に対する賛辞は、いささか褒め過ぎのきらいがある。洞察や扱う現象の範囲は、おそらく、Paul も負けてはいまい。しかしながら、この賛辞は、Meillet が、現代の文法化研究にとって、歴史のかなたにある単なる「先駆者」としてではなく、新たな洞察を直接与えてくれる源泉と捉えられていることを示すものである。

最近の文法化研究は、Heine and Kuteva (2002)に見られるように、通言語的な共通性に関心が向いている。とりわけ、文法化が通言語的にどのようなメカニズムによって起きるかを解明しようという動きが顕著である。次のようなメカニズムが挙げられる(Heine-Kuteva 2002: 2)。

> grammaticalization involves four main interrelated mechanisms.
>
> (a) desemanticization (or "semantic bleaching") — loss in meaning content
>
> (b) extension (or context generalization) — use in new contexts
>
> (c) decategorialization — loss in morphosyntactic properties characteristic of lexical or other less grammaticalized forms
>
> (d) erosion (or "phonetic reduction") — loss in phonetic substance

これらは、いわば、文法化のマクロ的な把握であり、文法化研究の当然に目指すべき方向の一つである。

5．ロマンス言語学との関係

文法化の通言語的一般化を追求する研究が言語学にとって有益であることに疑いはないが、一般化を進めるにあたっては個々の言語変化の的確な記述が先立ってあるはずであり、ロマンス語における言語史資料の多様性と豊富さからすれば、この面でさらなる貢献が可能であると思われる。逆に、ロマンス語内で孤立した言語変化を一般言語学的観点から捉えなおすこともできよう。その例を試みに若干挙げて、本稿を締めくくりたい。

ラテン語には *quomodo* (Meyer-Lübke 6972) という副詞がある。これは明らかに疑問代名詞と名詞 modus (mesure > manner)との奪格での複合に由来する。名詞の奪格形としては語末母音は長いが、この複合語では語末は長いことも短いこともあった。この語は、「俗ラテン語」的性格の強い言語では、*quomo, como* のように形態的に短縮され、接続詞の機能を帯びて使われる (Väänänen 1981: 163)。

Solebat sic cenare, *quomodo* rex. (Petronius)

彼は王のように食事を取るのが常であった。

後期ラテン語ではその用法はさらに広がり、「いかなる」の意味で疑問詞として用いられたり、理由や時間の節を導く接続詞として用いられたりするにいたる。

nihil ostendere conatus est *quomodo* sit veritas (Aug. Bapt. 6,37)

彼は、真理がいかなるものかを明らかにしようとは全く努めなかった。

non intelligetis, *quomodo* in parabolis posita sunt multa (Barnab. 17) IIe/IIIe s.)

多くが寓意によって語られているので、君らは理解できないであろう。

quomodo audierunt verba ista (Itala, Act. 5,24. cf. Vulg. ut)

彼らがこの言葉を聞いたとき

この語はロマンス諸語に伝わってさらにその用法を広げ、現代のロマンス諸語のそれぞれにおいてかなり広い用法を示しているが、その一方で、これを受け継ぐフランス語の comme に関しては、中期フランス語の時代までは理由を示す用法が例外的なものであったことが指摘されている。

L'emploi au sens causal de la conjonction *com(e), si com(e)* est exceptionnel avant le MF. (Ménard 1988: 212)

とすれば、*quomodo* から *comme* にいたる過程における、理由を示す接続詞としての用法の発展は、それほど直線的に進んだのではないかもしれないという疑問が起きてくるのである。この用法が後期ラテン語の時代の口語においてすでに確立していたとすれば、それは古フランス語に

おいても現れていておかしくないはずである。そうでないとすれば、この語の理由の接続詞への用法の拡大は、長時間をかけて、不均等に進んだのであることも考えられる。

本稿ではこの問題をこれ以上深く追求することはできないし、その解明につながる資料の有無も詳らかにしない。しかし、結びにあたって、この疑問あるいは同様の疑問は、文法化理論の精密化において有益な課題となりうることを指摘しておきたい。

本稿は、日本ロマンス語学会第 43 回大会（2005 年 5 月 21 日，大阪女子短期大学）における同名の口頭発表に基づくものである。発表の際にご意見をいただいた方々、および本稿を査読して有益なコメントをくださった委員の方々に深く感謝の意を表したい。本稿に残るいまだ至らぬ点は筆者の責任である。

参考文献

Anttila, Raimo. 1972, *An Introduction to Historical and Comparative Linguistics.* New York: Macmillan.

Harris, Martin. 1978, *The Evolution of French Syntax: A Comparative Approach.* London: Longman.

Heine, Bernd & T. Kuteva. 2002, *World Lexicon of Grammaticalization.* Cambridge: Cambridge University Press.

Herzog, Eugen. 1910, "Das to-Partizip im Altromanishen". in *Zeitschrift für romanishe Philologie*, Beihefte 26: 76-186.

Hopper, Paul J. & E.C. Traugott. 2003, *Grammaticalization.* Second Edition. Cambridge: Cambridge University Press. (初版の日本語訳：ホッパー, P.J. & E.C. トラウゴット 日野資成訳 2003, 『文法化』. 福岡, 九州大学出版会.)

Meillet, Antoine. 1912, "L'évolution des formes grammaticales". in: Meillet, A. 1975 *Linguistique historique et linguistique générale.* Paris: Champion.

Meillet, Antoine. 1933, *Esquisse d'une histoire de la langue latine.* Paris: Klincksieck.

Ménard, Philippe. 1988, *Syntaxe de l'ancien français.* 3e éd. Bordeaux: Bière.

Meyer-Lübke, Wilhelm. 1972, *Romanisches Etymologisches Wörterbuch.* 5.Aufl. Heidelberg: C. Winter.

Paul, Herman. 1920, *Prinzipien der Sprachgeschichte*. 5. Aufl. Tübingen: Max Niemeyer.
（日本語訳：パウル, H. 福本喜之助訳 1976, 『言語史原理』講談社. ただし、本稿では参考にとどめ、私訳に従った）

Väänänen, Veikko. 1981, *Introduction au latin vulgaire*. 3e éd. Paris: Klincksieck.